

1.. 「フィヨルド」ーそれは、氷河によって侵食されのが特徴 (アルバム 24、25、26 参照)。最大の「ソグネ・フィヨルド」の場合は、幅 数 Km、長さ 200Km、深さ 1,000 m、絶壁高さも約 1,000 m。ノルウエイの最高峰 Galdhøpiggen 2,469 m は最奥部近くにある。我国の岩手県三陸のリアス指揮海岸には、断崖と複雑な海岸線があるが、氷河の侵食による深い U 字谷が無いことが基本的に異なる。又、多くのクルーズ客船が入ってくるのが「ガイランゲルフィヨルド」。ソクネフィヨルドとともにこの両者が有名。私が乗船したときは、「ガイランゲル」に船は入らなかったので、陸から訪ねたのだが、今回代理店に確認すると、現在夏の航海では「ガイランゲル」に入るスケジュヘルになっているが、冬は入らないとの事。

2.. 「北への道」の開拓者 北端のノルドカップ岬の近くには既に 1.2 万年まえに人の居住跡が存在する。ゲルマンがドイツ北部からスカンジナビア半島に上陸したというが。古くから人は北を目指したことがわかる。降って、9 世紀後半、北部に居住した酋長 Ottar は、ノルドカップ岬の北端を回り、更に東進、「コラ半島」から「白海」にいたりヴァイキングした。これらの事績を追うのも楽しみの一つだ。  
現代の北への開拓者は、政策実行者のほかには、沿岸急行船を企業化したリチャード・ウイズを挙げべきであろう。偶々彼の偉業を記念する博物館の開館日にそこを訪問する機会に恵まれた。

### 3. . キルケネスと戦争博物館

3.1 第二次世界大戦のナチスとソ連の最前線の町である。時間経過をたどると、1939 年 8 月 より 1944 年 10 月 まで

「1939.8.24 独ソ不可侵条約締結。 「1939.11.16 ソ連、フィンランドへ侵攻。 「1940.3.6 休戦。「1940.4.9 独 ノルウエイ侵攻。「1941.6.22 独 ソ連開戦。 「1941.6.29 独、キルケネスよりムルマンスクへ侵攻開始。 1941.9.11 独のレニングラード包囲完成。 「1942.12.19 スターリングラード攻防戦で独が敗退、独の敗色が濃厚に。 「1944.1.18 レニングラード解放(ソ連勝利)。「1944.10.25 キルケネス解放、ソ連進駐 (独破れ、ソ連勝利)
--

「レニングラード」は現在の「サンクトペテルブルグ」、「スターリングラード」は現在の「ヴォルゴグラード」。ナチスは遂にこれらの戦略最重要拠点を落とすことが出来ず敗退、独ソ 戦のターニングポイントとなる。

キルケネスの住民 7,000 人、軍人 7 万人。ナチスは開戦後、直ちにこの町からムルマンスクーに向けて攻撃を開始した。頑強なソ連の抵抗により僅か直線距離 160 Km のムルマンスクを 3 年かけても落とすことが出来ず、反対に遂にソ連軍に占領されることとなる。この 3 年 4 月の間に、キルケネスでは空襲警報 1,015 回、空襲 328 回、住民 2,000 人死亡。我々の知らないこの極北の地で、厳しい戦争の現実があったことを知る。このほかにも「ノルウエイ・レジスタンス博物館」の資料も入手した。これも面白い。リューカン重水工場テロ攻撃とか、水力発電所爆破テロの現場見学をすると現実味が増す。ナルヴィック湾口に設けられたナチス砲台の資料も入手した。話題と興味は次第に広がる。.....

3.2 戦後、冷戦の時代を経たキルケネスでは、今は、寧ろソ連サイドからの労働者などの流入圧力に政府は危機感を高めている模様。このノルウェイ最果ての町への沿岸急行船の存在価値は高いと思った。帰国後、直接戦争博物館から資料を取り寄せて多くを知ることが出来た。

#### 4.ベルゲンとハンザ博物館

記録では、1191年に十字軍に属する数人のデンマーク人とノルウェイ人が鱈の買い付けにベルゲンにきて、その膨大な量に驚いている。買い付けの商人達は1259年頃からここに滞在して冬を越すようになった。正式にハンザの事務所が置かれたのは、1360年頃から1754年である。ロンドン、ブルージュなどの他のハンザ事務所に比べて規模が小さかったことと、沿革の地にあったことなどから、現在もその独特な関連の建物群はよく保存されて、世界遺産に指定されているし、EUは研究プロジェクト「ハンザ都市、その商路と遺跡」を発足させている。ハンザ博物館は1872年開設されたものだが、ここでも帰国後資料や図書を依頼して購入した。色々興味は連鎖して楽しい。

5.海運大国への歩み――私は先にMTS 100t 回・例会で「海事発達史」を発表した。然し、これは、産業革命以後について述べたものだったので、「ヴァイキングからあと」のノルウェイ海事の歩みは興味を惹くテーマである。産業革命以後の値を先ず5.1で見ると、

##### 5.1 1890年 世界第3位、2007年第6位

ノルウェイの船腹量は、「1890年に、英米について第3位」で、既に独・仏を押さえている。即ち [英 1,160万トン(54.9%)、米 182(8.6%)、ノルウェイ 158(7.5%)、独 157(7.4%)、仏 105(5.0%)]。120年後の2007年、実質支配船主ベースでは、「第6位」にランクされる。[日本 14.02%、ギリヤ 13.3%、独 8.9%、中国 7.0%、米 4.6%、ノルウェイ 4.4%]、以下に、ごく簡単にヴァイキング後のノルウェイ海運発展のエボックを記す。

##### 5.2 8～11世紀 ヴァイキングの時代で、圧倒的な活躍を展開。「その1」No.30 参照

5.3 14～17世紀 ノルウェイ海運は長期不振、ドイツ商人に支配される。ハンザ同盟自身は繁栄した。「その1」No/28,29参照。ノルウェイはハンザ同盟の恩恵を絵けるとはいえ、資源供給側に位置し、経済世界ではドイツ商人に支配され、搾取される時代である。これは、国王は国内商人保護からドイツ商人のベルゲン以北への航行禁止(1296年)措置をとる等したが、国王以下の富裕層が主導的な経済活動をしなかった事と、ヴァイキング・シツプの流れを汲む造船技術が貨物輸送に適せず、競争力を持ち得なかったともいわれる。

1445年 オランダはノルウェイ国王から、ある種の貿易特権をあたえられる。やがて、オランダ海運が台頭。ノルウェイ海運活動復興の直接的刺激となる(佐々木)。

##### 5.4 18世紀より発展期へ――オランダの台頭と退場、英国貿易への参入

1651年 英国は有名な航海条令を制定。これによりノルウェイ木材輸送において第3国になるオランダは排除されたが、当事国のノルウェイは参入がゆるされる。ノルウェイ海運発展の原動力はその木材貿易であった。ロンドン大火(1666年)により需要は爆発的に増大した。1825年のイギリス・ノルウェイ互惠協定は飛躍の直接の契機となる。など興味ある変遷をたどることが出来る。

#### 6.石油大国とムンク美術館

6.1 ノルウェイは北海油田の発見と開発によって、OPEC に加盟していないが、ロシア、サウジアラビアに次ぐ第3位の石油輸出国となった。今回紹介の旅行の起点となったスタバンガーはその中心的都市となった。世界最初のもス型 LNG 船を開発した「モス・ローゼンベルグ社」は川重とほぼ同じ長さの歴史を有する古い会社でここにある。モス社の第1船の試運転に神戸より出張同乗したのは、1975年12月初旬のことで、随分前のことになるが、真っ暗の早朝、リグのライトがシャンデリアの様に輝くのを眺めながら北海の試運転海域へフィヨルドを航行していったのが思い出される。貴重な体験だ。その後川重は日本で最初に大型 LNG 船を建造することになる。



北海油田鉦区図

## 6.2 ムンク美術館

ノルウェイ文化を語れば、必ずムンクの「叫び」の絵などを所蔵していることで有名なこの美術館をあげることになる。

オスロ市内東部にあるこの美術館に入ると、この建物建設に、出光興産が多大な経済的支援をした事を示す銘盤を見ることが出来る。更に、その後、度重なる盗難からようやく帰ってきたこの絵の修復も支援、更に東京の出光美術館と絵画の交流協定も結んでいる。これらの背景には、出光興産が北海油田のなかの、ベルゲンの北西 135 Km のフラーム・イースト油田に権益を得て、石油・ガス開発・生産活動を行っている背景があるからだと思われる。(おわり)



出光興産 鉦区

## 主要参考資料

1. 「ノルウェイ海道紀行」その1、2、3、4 岡本 洋。関西造船協会 「らん」第46、47、48、49。平成12年1月、4月、7月、10月
  2. 「Hurtigruten The World's most beautiful sea voyage」 by Erling Storrusten。Hurtigruten 社 1999
  3. Hurtigruten 社各種パンフレット及びhp <http://www.hurtigruten.com/norway/>
  4. 「Coastal Express」 by Mile Bent 1987
  5. 各種地図 ノルウェイ政府観光局、Hertz Local Guide 1998/1999、Google Map 等。
  5. 「ハンザの経済史的研究」高村象平 筑摩書房 1980.2.10
  6. 「北海油田」英国経済は蘇るか 岩佐三郎 日経新書昭和52年1月 及び出光興産hp など。
  7. 「ノルウェイ」海運業史要 佐々木誠治 海運 1957年 360,361,362号
  8. 「第二次世界大戦」マーティンギルバート著、岩崎俊夫訳、心交社 など
- 以上